



私たちの紙作り

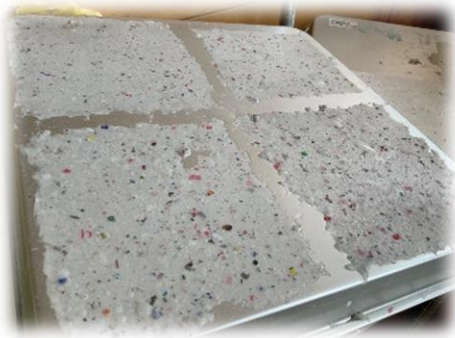
4年1組の「紙作り」は「折り紙の消費問題」から始まったので、子ども達の意識には「リサイクル」の視点がありました。しかし、これまでの様々な試しの中で、「リサイクル」という視点だけではなく、「一つの作品(アート)」として作っているという思いや、「紙作りそのものが面白い」という思いがあることが子ども達と取り組む中でわかってきました。

アートとして考えるならば、風合いへのこだわりは、パルプ作りからすでに始まっています。例えば、子ども達はペットボトルにパルプとビー玉をいれて、手でふり続



けることで、パルプが細かくなっていく

ことを発見していったのですが、そのようにするとパルプがミキサーよりも細かくなりすぎず、粒々した質感が紙に残ります。手間はかかるけど、その風合いの良さを感じ紙にしていって子どもたちもいます。また、折り紙の質感を求めてきた子ども達は、薄くてつるつるしている紙を目指してやってきています。子ども達は、すいた紙をお盆に乗せて仕上げるという方法を発見していったのですが、さらに両面がつるつるになるために、上からビニールをかけたり、アクリル板などで挟んだりする方法も自分たちで見つけていきました。薄くするために上から踏むという技法を取り入れて作っている子ども達もいます。



担任は、そのようにこだわっている風合いをいかせるといいなと思い、これまでに子ども達と作った紙で製作した「灯籠」を紹介し、その中に電球を入れると「うわー綺麗」「やってみたい」という声があがりました。Kさんはいち早く灯籠の骨組みを組み立て、これまでに作ってきた紙を貼り付けて、暗い



場所です。Aさん、Sさん、Rさんは

枠組みの発想を変えて、木で

作りました。Hさんが「部屋を

暗くしてみんなの灯籠の灯りをつけてみたい」と語ったことをきっかけに、一人ひとりが作った灯籠を持ち寄って暗くした学習センターで明かりを灯しました。そのとき、Rさんは「もちろん綺麗なんだけど、自分たちが作った紙だからこそいいんだよ。」と、自分たちの紙で作った灯籠への愛着を語っていました。さらにRさんは、「静かにこの明かりを味わいたい」と提案し、数分間、子ども達と暗闇と静けさの中で灯される優しい光を味わいました。